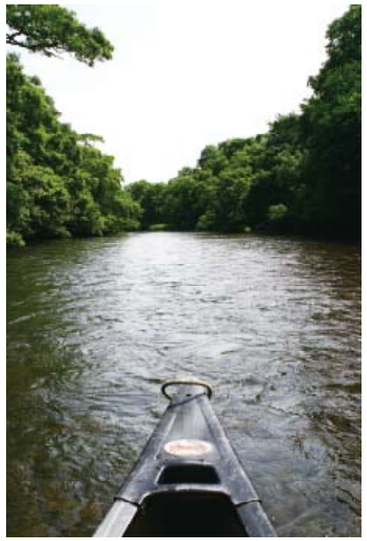
私の好きな「てしかが」の自然



屈斜路湖から流れ出す釧路川は3町1市を文字通り、曲線を描くように蛇行しながら太平洋へと辿り着く。

川のある日本の各地がそうであったように、川は昔から交通のための水路としても生きていた。釧路川も切り出した原木の流送に、生活物資の運搬に利用された。そして時には暮らしを潤す水辺として魚釣りや水浴びなど格好の遊び場としても生活に根付いていた。

しかし経済成長期、国土は大きく様変わりした。公共事業による国土開発が進んで生活は豊かになる一方で、山や海、河川の風景からは昔の自然らしさや風情が消えた。弟子屈も例外ではなく、市街地を流れる釧路川は1970年代の河川改修事業で護岸が整備され、川の流れは直線と化した。

ほどなく「アウトドア」という遊びが提唱され始めると、自然豊かな北海道には周遊目的の旅行だけでなく、野外遊びのために訪れる人たちが増加する。カヌーによる川下りが新たなアウトドア体験、旅のスタイルとして人気を集めた。

その先鞭を付けた本が「日本の川を旅する」（野田知佑著）であり、日本のカヌーブームのさきがけとなった。カヌーがあれば川を下れる。川面から日本を再発見する、であった。山における「日本百名山」のようなバイブル的名著だ。

いまでこそ年間利用客数が1万人とも推定される釧路川源流部であるが、90年代初め頃までは一部のカヌー愛好家が訪れるだけの、知る人ぞ知る憧れの川であった。ところがカヌーを初めとするアウトドア・ブームがマスコミの知るところとなると、北海道の大自然が注目され、カヌーは格好の被写体となった。漂う雰囲気は自然そのもの、川や湖に恵まれた弟子屈町には多くの取材協力要請が舞い込んだ。

初めは役場職員が対応していたが、その数の多さに限界となり、地元のカヌー仲間が集い、ガイド会社「ノース・イースト・カヌーセンター」を設立する。その一人、中尾啓二さんは当時を振り返り、こう切り出した。

「3日連続の番組だったけど、ロケハン、準備を含めて約1カ月かかった」。そして仕事といえども「良い絵を撮れるなら何でもやります」と、かなり無理な注文にも応じたそうだ。その背景にはカヌーフィールドとしての可能性を全国に発信するチャンスと感じていたのかもしれない。

その中でも印象深かったのが、深夜全国のお茶の間に放映された「水紀行」―厳寒の釧路川・屈斜路湖を紹介する仕事だった。朴訥な語り口で有名になった作家―故立松和平氏が担当し、人気のあったニュース番組内の撮影では現地ガイドの役を務めた。それが縁で以来、立松氏と親交を結ぶようになったという。

屈斜路湖の流れ出しから20分ほどの場所に、多くのツアーガイドが案内する川の淀みがある。湧き水が浸み出し、澄んだ静かな淀みは冬季でも凍らない。通称「鏡の間」というが、この名前は、中尾さんが前出の撮影中にスタッフに乞われ、アドリブで付けたそうだ。

川下りがツアー商品となる前の話だが、20年前のあの頃と変わらぬ自然環境が今も釧路川源流域の魅力である。

「鏡の間」という清らかな淀みは今も変わらない

釧路川

Data: 釧路川

全長154km、流域面積2510km²、流域内人口約24万人。屈斜路湖を源流に、釧路湿原を経て太平洋にそそいでいる。北海道内では十勝川に次いで、4番目に長い川である。上下流の標高差が120mしかなく、ゆったりと蛇行しながら流れる、日本ではめずらしい河川である。昭和62年に国立公園に指定された釧路湿原は、特別天然記念物のタンチョウをはじめ、貴重な動植物の生息地となっている。現在、ラムサール条約により国際的な保護のもとにおかれている。